Special Talk Session

福井正興×紺野美沙子 会頭対談

すべての行動は知ることと、関心を持つことから

紺野美沙子さんは1998年に国連開発計画（UNDP）親善大使に任命されて以来、9ヵ国10地域を訪ね、世界の貧困や戦争の現実をわかりやすく伝える活動を続けています。「世界の国々に関心を持つことは自分以外の第三者に関心を持つことと同じ」と語る紺野さんと福井会頭に、日本の国際協力のありかたになどについて語っていただきました

被災地には息の長い支援を

福井　東日本大震災から4ヵ月余りが経ちました。日本JCは震災翌日から「東日本大震災」日本JC対策本部を設置し、支援を続けています。震災直後は、東北にいるメンバーからの現場の生の声に耳を傾け、必要とされる物資を送りました。1、2ヵ月後からは、人的支援として炊き出しや泥かきなどのボランティアに当たりました。今後は、心のケアが大事になってきます。被災地の子どもたちを受け入れるサマーキャンプのほか、仮設住宅の入居者に対するケアも考えなければなりません。7月初めに被災地を訪ねたところですが、ようやく瓦礫が片付いたところというのが現状です。3年、5年という長いスパンで支援をしていかなければいけないと思っています。紺野さんは今後どのような支援が必要だとお考えですか。

紺野　マスコミの報道を通じての情報しかありませんが、国の支援が遅れていることが気になります。必要なところに速く、経済的な支援が行き渡るようにしてほしいものです。そしてメンタル面の支えも必要です。会頭がおっしゃったように、物質的にも精神的にも息の長い支援が必要だと感じています。

福井　紺野さんは、病気や戦争で親を失った世界の子どもたちを見てこられています。被災地にも親を失った子どもたちがたくさんいます。こうした子どもたちにはどのような支援が必要でしょうか。

紺野　多くの途上国を訪問しさまざまな現実に触れる中で、親を失って苦しんだり悲しんだりしている子どもたちを見ることほどつらいことはありません。そのような子どもたちにどうすれば安心を届けることができるのだろうかといつも考えます。一番大切なことは、何かあったら守ってあげる人がいるという安心を感じてもらうことではないでしょうか。それはJCのお兄さん、お姉さんでもいいと思います。あと忘れてならないのは、そうした子どもたちを養育されている方々への支援です。一人親であったり、里親であったり、おじいちゃんおば

あちゃんであったりとさまざまだと思いますが、養育で疲弊しきってしまわないようにしないと共倒れになってしまうおそれがあります。

海外での日本の存在感

福井　紺野さんは13年前から国連開発計画の親善大使を務めておられます。女優業が多忙な中大変だと思いますが、どのような想いで引き受けられたのでしょうか。

紺野　私は英語が苦手ですし、社交的でもなく、国際協力に特別な関心があったわけでもありません。それなのに声をかけていただいたのはご縁だと思い、こんな私でもお役に立てるのであれば、と喜んで引き受けました。これまでに、カンボジア、パレスチナ、ブータン、ガーナ、東ティモール、ベトナム、モンゴル、タンザニア、パキスタンを訪問しました。

福井　カンボジアには日本JCがスポンサーになって青年会議所ができました。若者の熱気はすごく、なんとかこの国をJCによって発展させていこうという情熱にはすごいものがあります。われわれもとても刺激を受けています。

紺野　昨年パキスタンに行った時に、若い方たちから「日本が戦後ゼロから発展したように、パキスタンも発展していきたい」という熱い言葉を聞きました。どこに行っても日本の存在感を感じることができるのはうれしいことです。

福井　親善大使として各国を回るようになって、考えが変わったことはありますか。

紺野　以前は、日本のODAはむだ遣いされている、役に立っていないという報道を多く目にして、マイナスイメージばかり持っていました。ところが実際に行って現地で話を聞いてみると大部分は役に立って感謝されていることがわかりました。カンボジアのトンレサップ河に架かる〝日本カンボジア友好橋〟も日本の無償資金協力によって完成した橋です。他にも、日本の支援でできた港や道路などのインフラも多いですし、草の根の支援で井戸がつくられたりもしています。また、助産婦さんが電気や水道のない場所でお産のお手伝いをしていたり、青年海外協力隊やシニア協力隊の方もたくさん活躍されています。そのようないい面があまり報道されていないのは残念ですし、私たちももっと関心を持たなければいけないと思います。

福井　途上国における貧困の問題があることは日本の皆さんは理解していても、どうしても遠い国の出来事であって、アクションを起こすまでにはなかなか至りません。それは日本JCで取り組んでいる北方領土問題などの領土領海問題についても同様です。震災が起きたからといって海外支援をやめるわけにはいきません。忘れ去られそうなことを無関心層にどう伝えればいいのかいつも悩むところです。一つの方法は、見えやすい形でわかりやすい支援をするということだと思っています。

その一つが、「JCI Nothing But Nets キャンペーン」です。マラリア撲滅のためにアフリカに蚊帳を送る運動です。蚊帳を使うことで子どもや家族がマラリアから守られるわけですから、寄附のように何に使われるかわからない支援よりも、ロジックが見えて理解も得られやすいのではないかと考えています。わかりやすい支援を行なうことによって、私たちが発展を享受している半面、貧困の現実があるということを知ってもらうことに繋がると考え、積極的に取り組んでいます。こうした取り組みをどのように広げていけばよいのか、いいアイデアはありますか。

紺野　私は1年365日ずっと親善大使の仕事をしているわけではありません。仕事も家族との時間も大事ですし、自分のための時間も必要です。いろいろな時間がある中でその一部を親善大使の活動に充てています。だれもがみんな限られた時間を生きています。そのなかで、自分が持っている時間の一部を見知らぬ第三者のために使おうよと話しています。一人ができることは小さなものかもしれませんが、そういうことがごく当たり前になればものすごく大きな力になっていきます。大切なのは自分ができる範囲のことをやることです。お金のある人はお金を寄附すればいいし、体力のある人は現地で汗を流せばいい。無理しない範囲で長く続けることこそが大事だと思っています。そういう仲間をどんどん増やしていければいいなと考えています。そのような役割なら私にもできそうです。知ったかぶりをせずに、私はこうしているけど皆さんはどうですかという気持ちでやっています。

恵まれた日本に生まれたからこそできることを

福井　日本人は熱しやすく冷めやすいところがあって、長くやらないといけないのに、少し続けるとまた関心が次に移ってしまうところがあります。私はメンバーに切羽詰まった想いだけで突っ走るのではなく、10年先を見て進んでいこうという話をよくしています。目先のことに惑わされるのではなく、本質を見極めて取り組むことが求められていると考えています。

ところで、紺野さんは、子どもたちにもさまざまな場でお話をされているとのことですが、子どもたちに伝える時にはどのようなことに気をつけておられますか。

紺野　小学生の授業などでは一方通行にならないように気をつけています。

自分が持っている時間の一部を見知らぬ第三者のために使おう

女優・国連開発計画（UNDP）親善大使

紺野美沙子

こんの・みさこ

1960年、東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒。1980年、NHK連続テレビ小説「虹を織る」のヒロイン役で人気を博す。テレビ・映画・舞台で活躍する一方、1998年、国連開発計画親善大使の任命を受け、カンボジア・パレスチナ・タンザニア・東ティモール他、アジア・アフリカの各国を視察している。著書に「ララ親善大使」（小学館刊）がある。

目先のことに惑わされるのではなく、本質を見て取り組むことが求められている

日本JC第60代会頭

福井正興

ふくい・まさおき

1971年11月生まれ。同志社大学商学部卒業。94年株式会社福寿園入社、2005年同社取締役副社長就任、現在に至る。01年京都JC入会、08年に理事長就任。日本JCでは、07年サマーコンファレンス運営委員会委員長、09年・10年副会頭を経て、11年1月より現職。

席のそばに寄って行って「今、世界の5人に1人が1日100円以下で暮らしているけど、世界の最貧国の暮らしってどういう生活だと思う」というような問いかけをして考えてもらいながら、想像してもらいながら理解してもらえるように意識しています。

経済的に貧しかったり、戦争などの状況によって小学校に行けない子どもたちが世界には6500万人くらいいます。一方、日本は中学までは義務教育で、多くの人は大学まで進み、職業も選ぶことができます。経済的にも教育の面でも恵まれた日本に生まれたからこそ世界のリーダーとなって格差解消のためにできることをやっていってほしいと伝えています。すべての行動はまず知ること、関心を持つことから始まるのだと思っています。日本では当たり前のことが一歩海外に出るとまったくそうではない、食事にしてもエネルギーにしても先進国と途上国では隔たりがあるということを知ってもらい、そこでできることを一人ひとり考えてもらえたらと思います。

福井　国連開発計画と民間企業とで一緒にできることはあるのでしょうか。

紺野　BOP（Base of the Pyramid）などの活動があります。途上国の市場開拓と社会問題の解決を同時に図ろうという考え方で、ビジネスを通じた新しい支援の形だと思います。

福井　JCの世界組織であるJCIの会頭を今年は日本から輩出しています。そこで取り組んでいるのはグローバル・コンパクトです。グローバル・コンパクトの署名企業は、人権の保護、不当な労働の排除、環境への対応、そして腐敗の防止に関わるCSRの基本原則10項目に賛同する企業トップ自らのコミットメントのもとに、その実現に向けて努力を継続することになります。加盟企業の多くは大企業ですが、中小企業もこういうことを意識していかなければなりませんし、世界に繋がる地域企業の一員としての責任について関心を持つ企業が増えることを期待して取り組んでいます。

紺野さんは、朗読、読み聞かせにも力を入れてらっしゃいますね。

地域活性化から世界を考える

紺野　去年の秋から朗読座の活動を始めました。横浜に住んでいるのですが、たまたま自宅の近くにホールができたので、そこで定期的に朗読の会をしています。これも自分にできる範囲のことの一つです。自分の好きなことを一生懸命やって周りの人に喜んでいただけたらいいなと思って始めました。朗読と映像と音楽を組み合わせたパフォーマンスで、童話や詩、物語などを読んでいます。

今は一人でいてもテレビやインターネットを通じてさまざまな情報が手に入ります。でも、そうではなくて一つの場所に多くの人が集まって時間を共有しながら、想像力を必要とする朗読を通して、頭の中でイメージを膨らませる楽しさを感じ、心を潤わせ、耕してほしいという想いもあって取り組んでいます。

こうしたパフォーマンスは地域活性化にも活用できると思っています。たとえば地域に昔から伝わる物語を朗読して、地域の伝統芸能の人とコラボレーションしてもいいでしょうし。子どもたちと何かを一緒にやってもいいかもしれません。それほどお金もかけずに地域を元気付けられると思います。

福井　JCの地域の組織でも、地元の偉人を物語にして冊子にする活動に取り組んでいる青年会議所があります。日本JCでも、地域の子どもたちに、正しく善く生きた偉人たちを語り、そこから日本の文化や精神性を学んでもらう「ドリカムキッズジャパン」に取り組んでいます。そのようなパフォーマンスを使うとより知ってもらうきっかけになると思います。紺野さんもよくおっしゃっておられますが、まず地域の人に目を向け、考えることが、世界の国々、人々を考えることにも繋がるのでしょうね。

紺野　私は地方に行くのが大好きなんですけど、地方が元気でないとつまらないでしょう。外に出てみると、日本ってやっぱり世界一いいところだなと実感します。それぞれの地域の文化、伝統、歴史をもう一度見直して、地域色豊かな日本になってほしいですよね。特に最近は温故知新という言葉が気になっています。古き良き時代の日本のことをよく知って、その上で日本をどう変えていけばいいのかを考えることが大事なのだと思っています。

福井　JCのメンバーにメッセージをいただけますでしょうか。

紺野　JCが掲げている素晴らしいいくつかのスローガンを日々誠実に実践していっていただきたいと思います。若い世代の人たちが頑張ってやっていると思うと、私たち上の世代も何か協力したくなるものです。子どもたちにとっても、お兄さん、お姉さんたちが頑張っているから何かできることをしようと思うはずです。だからJCの皆さんは上の世代からも下の世代からも共感が得られやすい、とてもいい位置にいると思います。JCの役割はこれからますます大きくなると思うので大いに期待しています。私もお役に立てることであれば喜んで協力させていただきます。

福井　私たちももちろんがんばりますが、紺野さんのように応援してくださる方がいらっしゃると、被災をこうむっているメンバーも、全国のメンバーも、とても心強く思います。ぜひ応援していただければと思います。ありがとうございました。

＊　＊　＊